

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 大橋厚子

本論文は17世紀末から19世紀はじめにかけて、西ジャワのコーヒー栽培地域において、東インド会社のコーヒー独占輸出システムがもたらした農民社会の変貌をあきらかにしたものである。インドネシアの社会経済史研究は植民地時代以来、長い伝統をもち、日本にも多くの世界的な研究蓄積があるが、その多くはジャワ中東部の研究に集中し、17世紀から植民地経営が優越する西ジャワはほとんど例外視されていた。大橋氏の研究は西ジャワの植民地社会史を再構成し、植民地システムの形成を通じて、現代社会を省察しようとするパイオニア的であり、同時に画期的な論文である。

コーヒーの安定的な供給を目的として、東インド会社は当該時期の約1世紀、なかでも18世紀後半以降の時期に、さまざまなハード、ソフトのインフラストラクチャーを整備し、在地社会と世界市場とを強引に結びつけ、在地社会の大規模なコントロールシステムを作り上げた。この在地社会の世界システムへの組み込みによって、成年男子の労働力が強制的に家庭外、地域外のシステムに吸収され、この結果、女性労働力が家事労働と生産労働の過剰な負担を迫られると同時に、家庭と地域の中核になっていく。本論では近世後期に出現した植民地のシステムが、一つの地域社会を破壊し、変質させ、現代の社会の原型を構築したことが、膨大な資料を駆使して証明されている。

18世紀初期、オランダ東インド会社が西ジャワプリアンガンを領有したころ、眼目のコーヒーの供給は、在地の首長層、および華人の流通に任せられ、発展する欧州市場に比してきわめて不安定だった。1740年代、東インド会社は運河建設、パサール（市場）開設、欧人プランテーション開発などのインフラ整備とともに、在地首長を植民地地方行政に組織化し、また在地首長層への融資システムを作り、在地首長層を通じてのコーヒーの安定供給に成功した。

1780年代以降、東インド会社は、賦役を動員した大農園の大規模開設とともに、コーヒー監督官の現地への常駐、在地社会秩序のコーヒー集荷システムへの編成を行い、市場の需要にみあった供給システムを作り上げた。同時に輸送ルートを新設し、在地首長のルートに依拠せずにコーヒーを港湾に積み出すハードなシステムも開設した。この結果、在地首長のコーヒー集荷独占体制は解体し、下級首長、有力農民のコーヒー供給への参加がはじまった。また大規模な水利灌漑工事を施し、住民の水田化を促した。灌漑水田の整備により、住民の農業暦はコーヒー栽培と出荷に対応したものに變質した。こうして、住民、とくに青壮年男子の労働力は、新しい消費物資とひきかえに、ことごとくコーヒー栽培と出荷に適応させられた。この結果、これまでの自律的な地域社会は變質し、世界市場を前提とするオランダ植民地システムへの構造的な従属を強いられた社会が生まれた。世界市場とリンクさせられたがゆえに、西ジャワ史の以後の展開は、より變動の激しいものになる。コーヒー生産の相対的な低落、これにかわる織布業の発展、農業社会の再開発など折々の政策の強い影響のもとに、西ジャワは變質していく。18世紀末の巨大な在地住民のコントロールシステムの形成が、13世紀以来の西ジャワの世界と現在の西ジャワの社会との分岐点になっている。

以上の大橋氏の所説は、膨大なオランダ語資料を収集、分析し、古い地形図の詳細な分析、考証などを加えた、すぐれて実証的な研究であり、きわめて堅実なすぐれた歴史論文である。同時に、随所に世界システム論、あるいは近世封建制度論など、既存の研究への鋭い批判を加え、さらに大橋氏の独自のインドネシアに限定されない鋭い現代社会分析の視座を主張している。今後の東南アジア研究にはかりしれない貢献を果たす業績と評価できる。よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。